

田口啓子著：スアレス形而上学の研究

1977. 南窓社 pp. 270

山 辺 建

本書はわが国における最初の本格的なスアレス哲学の全貌の紹介書であるとともに、その研究書でもある。スアレス哲学、特にその形而上学は西欧思想史に占めて来た位置に比す時、わが国では未知と言え、スコラ形而上学教科書、紹介書等において、*essentia* と *existentia* の区別、個別化の原理等に関して、いわゆるトミストの立場からみでの異説として紹介されて来たのがせいぜいであり、現在わが国で一般に入手可能な比較的包括的な紹介としては、Fr. Copleston S. J. 著 *A History of Philosophy*, Vol. 3 におけるそれしかない現状を考え合わせる時、本書の意義は大きいと言わねばならない。

スアレスのいわゆる *Disputationes metaphysicae* (著者は『形而上学の諸問題』と訳す。Disputationes なる概念の意義を必ずしも正確に伝えていないが以下これに従う) はアリストテレス以降最初のアリストテレス註解という殻を破った「形而上学」であるとともに(ついでながらスアレスはその神学の体系化においても聖トマスの *Summa theologiae* 註解の従前の型を脱脚して行く)、量的に史上最大の「形而上学」とみられている。)ノミナリズム、近世ヒューマニズム、宗教改革に契機を得た神学のみなおし等を踏まえての彼の形而上学は、一方では非トミズム、反アリストテレス主義(それぞれ理由があることは本書でも詳しく論じられる)、折衷主義と非難されるが、他方近世的意識での中世の見なおし、新しい総合として高く評価されて来た(Doctor *eximius et pius*. R. Descartes や G. W. Leibniz との類似性・関連は早くから指摘されて来たが、近代以降に特徴的な批判精神の先駆をスアレスに見出すものもある。ちなみに『形而上学の諸問題』は17世紀のドイツ・プロテスタント諸大学において哲学教科書として用いられたこともある。)。現代におけるスアレス研究の第一人者と目されている E. Elorduy S. J. に直接師事したこともあり、スペイン語にも熟達している筆者によって同書が紹介されたことは時と人を得たものと言えよう。

本書は二部および結論より成り、それにスアレス研究の歴史並びに参考文献が加えられている（スペインにおける哲学的研究が中心であり、1732年ケルンで神学の“*compendium*”が出版されていることや1861年(!)に K. Werner による紹介研究が発表されていることは言及されていない）。

第一部ではスアレスの生涯およびその著作が紹介される(9-41頁)。著作は年代順に配列され、簡単な解題が附され、(この種の記述では、たとえば、De Fide に関する項—37頁—で Disp. 9, 10, 11 に先行する B. Alvarez S. J. の註—これは1948年以降スペイン、ドイツにおける論争の契機ともなっている——が言及されないことは止むを得ない)、体系的思考家であるとともに発展的の思考家でもあったスアレスの姿をよく浮き彫りにしている。

いわゆる哲学生時代および哲学教授時代、更にはそれまでの神学教授を通じて得た(哲学的)問題意識を最初にまとめた *De essentia, existentia et subsistentia* (1592年頃、そのままの形ではまだ発見されていない)、『形而上学の諸問題』(1597年公刊)および最晩年に形而上学的諸問題を再検討しようとしていることから著者は、自己の形而上学の深化こそがスアレスにとっての生涯の課題であったとし、従って『形而上学の諸問題』が彼の代表作であると結論する(40頁)。この結論には、わが国においてこの方面でのスアレスがほとんど知られていないことへの著者の反撥も込められていると思われるが、スアレスの形而上学が彼の思想全体の中で正しく位置付けられるならば——著者はスアレス哲学を「キリスト教哲学」, 「*ancilla seu ministra theologiae* としての哲学」と特徴付けている——正確なスアレス理解と言える。

第二部「スアレスの形而上学」は本書の主要部をなす(51-250頁)。ここで著者が目指していることは、何よりも *vives* 版で二巻、2000頁に及ぶ『形而上学の諸問題』の内容を忠実かつ理解し易い形で紹介することであると思われる。そのため著者はまずスアレス自身に語らせることを心掛け、著者自身の解釈・解説は極力抑えられている。もちろん必要な解説や参照箇所は本文あるいは註で示され、補われている。若干の不用意な点——たとえば、56頁の「伝達可能性」*communicabilitas*

は *communitas* (共通性) の読み誤りと思われる。但し該当する註 (98頁, 註14) では正しく引用されている。またコンテキストからみて引用個所が異っているとは考えられない。135頁で註116をつけて引用されるテキストは (註の冒頭からも明らかのように) *secunda sententia* として対比される Caietanus 説であり, (sect. VIII, n. 5), 全説に対するスアレスの自己同化は n. 6 で明らかにされるのであるが, それには言及されていない。聖変化を *trans(s)ubstantiatio* と同一視すること (180, 210頁等) はスアレスに関しては不適當である。信仰上の真理としての聖体におけるキリストの現存, そのための条件としての聖変化 (*mutatio seu conversio*) および後者の哲学的理解としての実体変化 (という要請と *transubstantiatio* なる呼称) を明確に区別することはスアレスが聖体におけるキリストの現存を説明する際最も意を用いている点である。更に本書には特にラテン語引用テキストの中にミスプリント (それ自体としては余り重要なものではないが) が多い——を別にすれば, 第二部はスアレス形而上学の見事な要約であり, テーマの取捨選択, 組み替え (後者はその都度本文あるいは註で明らかにされている), 解説の附加を通じて, ひとつの「研究」ともなっている。(スアレスのテキストを参照することが必ずしも容易でない読者にとっては, 『形而上学の諸問題』の全 *Disputationes* のタイトル一覧表のようなものが附されていたら一層親切であったと思われる。)

第二部は (現代スコラ形而上学に契機を得つゝ) 形而上学の対象一般 = 存在するかぎりの存在(者)一般について (第一章), 全ての具体的存在(者)をその連関性において包括する一般的理論としての原因論 (第二章), および現実に存在する存在(者)の諸領域 = 具体的には神についてと有限な存在(者)の最高類について (後者はいわゆる範疇論) (第三章) の三章に区分される。各章は更に3乃至6節に分けられ, スアレスの理論が, 論理的配列の中で紹介されている。この第二部の功績は, 従来わが国で断片的にのみ紹介されて来たいわゆるスアレスの *sententia* をスアレス自身の思想のコンテキストの中に正しく位置づけて紹介するとともに, 存在概念, 作用因概念, 「個」の重視等, 従前の形而上学に対してスアレスのそれが有している独自性を明確にしている点であろう。(たゞスアレスと同時代の学者との比較での彼の独創性は本書では具体的には必ずしも明らかにされない。これは著者がスアレス形而上学全体の展望に重点を置いて, 同時代との具体的な比較を後

退させているためであるが、たとえば1617年(!)に収集出版されている G. Vazquez S. J. の *Disputationes metaphysicae* 等をも紹介されることを著者に希望したい。) 著者はスアレスが、神の存在証明のための聖トマスいわゆる *quinque viae* を批判している点のみならず、聖トマスが “*quam omnes Deum nominant*” (あるいはこれと同価な表現) で軽く流している点にまさに問題をみていたことも見逃さず紹介している (147頁)。

「結論」(251-257頁)は短いものであるが、ここで著者の見解が(始めて)明確にされる。著者はスアレスの形而上学を「キリスト教哲学」(の一典型)と特徴付けるが、第二部で、彼の「形而上学」を通観した後に、「結論」で彼の形而上学とキリスト教的たらしめている根源的理拠について考察する。現代あらためて意識に上ってきている「そもそもキリスト教的哲学なるものは存在するのか、また、し得るのか」との問題に対して、「ある哲学が神学の婢女であるばかりでなく、更にキリスト教哲学の名で呼ばれる場合には、単にキリスト教神学の基礎知識を提供するだけでは充分でないことは言う迄もない。即ち哲学であるかぎりの哲学としての独自の性格においてそれがキリスト教的であるというのでなければならぬ。しかしながら「キリスト教学派」とでも称すべき特定の学説や体系がかって存在したわけではなく、むしろ、その著者の「哲学する」方法、即ちキリスト教の信仰に哲学の研究を一致させる哲学者の態度こそが、キリスト教哲学そのものであると考えられる。このことは「キリスト教哲学」が何等の体系も、明確な学説を持つてはならないことを意味するのではなく、むしろこのように哲学する場合、当然、独自の体系をもった学説が浮び上ってくる筈である」(252頁)と答えた上で、スアレスの形而上学を神学から区別された意味でいわば完結した哲学たらしめると同時に、それに内的統一性を与えているキリスト教的要素を明らかにしようとする。

スアレスの「キリスト教哲学」のキリスト教哲学たる究極の所以を彼の「実在的存在であるかぎりの存在」という対象的概念に求める人々(254頁)に対して、著者は彼らの主張の意図を十分理解しつつも、それはスアレスの「キリスト教哲学」の根本的特徴を指摘するものとしては、未だ充分ではないと考え(255頁)、この特徴を、スアレスが有限的存在(者)を無限存在(者)に絶対的に帰属しているもの

とみている点に見ようとする。そして両者のこの関係を明確にする理論が、アリストテレスとは異った意味でのスアレスの作用因の理論（両者の相違を明確にするため著者は *causa efficiens* を特に作用因と訳す）であると考えている（255頁以降）。

この見解はスアレス理解として斬新であるばかりでなく、affirmative に主張されるかぎり、正しいと言わねばならない。たゞ著者が十分に顕現化していない（もう）ひとつの鍵がスアレスの形而上学には含まれていると思われる。それはスアレスにおいて有限存在（者）は無限存在（者）に絶対的に帰属しているものとしてのみならず、極めて積極的な意味で *potentia oboedientialis* として扱われているという点である。（神も含めた）「自然」が自然的秩序の中でいわば内的に完結していながら（これがスアレスが独立した「形而上学」を構築し得た所以であろう）、しかも神の側からも被造物においても「超自然」に向って開いているという構造を自然の形而上学的分析から明らかにしようとしているのが彼の「形而上学」ではなかろうか。そしてこゝに中世と近代の接点といわれるスアレスの思想的意義もあるのではなかろうか。

種々の意味で非常な労作である本書がスアレス研究、更にはトミズム復興以降のスペイン思想の研究の良き契機となることを希望したい。

山田晶著：アウグスティヌスの根本問題

——中世哲学研究 第一——

1977. 創文社 pp. xix+387

加 藤 信 朗

今回、山田晶教授の三十年に亙るアウグスティヌス研究の成果が一書に纏められ、上梓されたのは喜ばしい。これはこの三十年間の教授のアウグスティヌス研究の歩みのなかで、その折その折、教授に立ち現われた問題への教授のひたむきな取り組みの記録である（内、多数の論文は今回大幅に手が加えられ、新たな論文となっている